

博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報

第六回企画展

砂金学ノススメ

各地の砂金と採集具展



期間 平成15年3月29日(土)～5月11日(日)
場所 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館多目的ホー儿

観覧無料(常設展示は別途料金)

主催 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館
協力 湯之奥金山博物館反の会・甲斐国砂金掘り反の会

第6回 企画展開催にあたって 「砂金学ノススメ～砂金とその採集具展～」

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長 谷口 一夫

日本における砂金による産金活動が奈良時代の天平年間に始まったことは、ほぼ定説化されています。それは、続日本紀に749年（天平21）4月に陸奥守従三位百濟王敬福によって小田郡から産金された黄金900両（我国家黄金從此始出焉＝日本最初の産金）が、聖武天皇に献上されたという記録によります。

聖武天皇は、天平19年から鑄造を開始していた奈良・東大寺の盧舎那仏（通称＝奈良・東大寺の大仏）の建立で、仏体に鍍金する黄金に窮していたときに献上されたことに喜び、陸奥国の出金を賀する詔書を発布。天平21年に年号を天平感宝元年（同年天平勝宝と改められる）と改めたと言われています。

この詔書に対する反歌三首が、万葉集18・4094-7に「賀陸奥国出金詔書歌一首並短歌」としてみられます。「すめろきの御代栄えむと東なるみちのく山に金花咲く」天平感宝元年5月12日於越中国守館大伴宿禰家持作之（扇畑忠雄訳・わが天皇の御代が栄えるであろうと、東のみちのく山に黄金が花と咲いたことだ）と歌われています。

扇畑忠雄氏（東北大学名誉教授）は、延喜式神名帳や続日本紀などに記載されている式内社黄金山神社一帯の山地（宮城県遠田郡湧谷町黄金迫）が、我が国最初の黄金産出地であると推定しています。

この黄金山神社は湧谷町黄金迫に遺跡として残っています。昭和32年に東北大学伊東信雄教授らによって発掘調査され、天平……の文字が見られる籠書文字瓦の出土や陸奥国分寺出土瓦と同形の瓦の出土があり、文字史料や考古資料などから、この神社と一部河川が「黄金山産金遺跡」として、昭和42年に国史跡に指定されています。

湯之奥中山金山や黒川金山で代表される甲斐金山遺跡群は、それから約800年後のことで、砂金に代わる山金採掘の初源的様相をみせていますが、その約800年間は、砂金中心の採掘が行われてきましたが、実はまだその経営など含め実態は明らかにされていません。金山という括りの中で、砂金も山金山も包括されていますから、これからは金山遺跡ごとに資料の検出と、資料調査を積み重ね整理する必要があります。

このような金山史研究における課題をもつ近年、金鉱石や砂金（自然金）採掘に情熱を傾けている方々がいて、全国の河川などから砂金を採掘、標本を作ったり、更には分析を試みる皆様が、数々のデータを持参しながら金山博物館に来館され、情報交換しながら、各河川を探索するケースが増えてきました。

目的は①アウトドアスポーツとして、②趣味として、③日本や海外の収集具を調査研究、更には復元し、河川で実践するなど様々ですが、それらの皆様の努力が必ずや金山史（特に砂金採掘変遷史）研究の基礎的なデータの蓄積につながるのではないかと考えています。そう考えるに至りました。

特に、砂金自体は鉱床、鉱石など自然科学の領域ですが、その発見、採掘、利用など人が関わる部分については、人文科学の領域としてとらえることが可能です。採掘具などの時代的な変遷過程は考古学的な手法で、その変遷がとらえられます。

それらを模索する為に、また議論する為に、関係者の皆様のご協力を頂き今回の企画展の開催となりました。金山博物館では金山史研究に基づくものを「企画展」、一般教養的な内容の場合「特別展」としてありますが、今回は金山史研究につながるものとして「企画展」として取り組みました。ご協力頂きました関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。なお、多くの皆様方のご観覧と今回の企画展に対する忌憚のないご意見ご感想を頂けましたら幸いです。

第6回 企画展 「砂金学ノススメ～各地の砂金と採集具～」

解説：学芸員 小松美鈴

日本産金史の始まり

権力者の墳墓や古代遺跡から、金製品が出土・発掘される例は珍しくはありません。金は、古代七金属（金、銀、銅、水銀、鉄、鉛、錫）の筆頭で、古くからその存在を知られ、その美しい輝きと優れた安定性・不変性ゆえ富と権力の象徴としてだけでなく、神聖な金属として人々から尊ばれ、人々を惹きつけてきました。

日本において最も古い金製品は、後漢の光武帝が奴の国王に送ったとされる『漢倭奴国王（国宝）』の金印ですが、日本は長い間金を朝鮮半島から輸入しており、この金印も年代比定は西暦52年、原料として使用されている金は中国大陸のものという分析結果が報告されています。つまり、古代日本において金の産出は知られていないということになります。

我が国の初産金は『続日本紀』により「陸奥国より始めて黄金を貢す。こゝにおいて方幣を奉つてもつて畿内七道の諸社に告ぐ」と記載されていることから始まります。749年（天平21）2月22日のことで、さらに同年4月22日、陸奥国守百濟王敬福は黄金900両を朝廷に献上しました。陸奥国小田郡で砂金が取れたというこの知らせに、大仏造営にあたり、鍍金の黄金が不足していることを憂慮していた時の天皇・聖武天皇は大いに喜びました。産金の知らせに伴い年号を天平感宝元年と改めたこと、そして東大寺の大仏はもともと鍍金が施され、建立当時はきらびやかな姿をしていたという史実は余りにも有名です。

史料に見える「小田郡」は現在にその名を残していませんが、現在の宮城県涌谷町黄金迫のあたりであろうと研究発表され、昭和32年には発掘調査が行われ、さらに涌谷町黄金迫地内延喜式内黄金山神社境内を中心とする地区は、昭和42年12月15日に「黄金山産金遺跡」として国史跡に指定されています。

この初産金の事実には、日本よりもはるか以前か



宮城県涌谷町 天平ろまん館

ら金を回収・利用していた大陸からの渡来人が一緒に採金技術も携えてきたのではないかと推定されており、非常に興味深い点でもあります。我が国の産金が史実以前にさかのぼる可能性を十分に持っていることもまた否めません。

古代産金地の開拓・変遷

750年（天平勝宝2）3月、陸奥国の産金に続き、駿河国盧原郡多胡浦の浜（現・田子浦）から産金があり、駿河国から黄金が貢献されました。孝謙天皇は同年12月に駿河国守の檜原東人に勤臣の姓と、従五位上の位階を授けました。この貢金は涌谷から数えて2番目ということになります。

陸奥国、駿河国と続いてその後も、産金があった地域として下野（栃木）、常陸（茨城県）、佐渡（新潟県）が知られています。835年（承和2）には、下野国（栃木県那須郡馬頭町建武）にある建武（たけふ）山神社が砂金の採れる山に鎮座するということで叙位され、続いて836年（承和3）、陸奥国白河郡の八溝黄金神が国司の祈祷に応じて通常の2倍の砂金を採り、遣唐使の資とすることが出来たので封戸二烟を充てたなどと、次々に各地から産金の知らせが届くようになります。

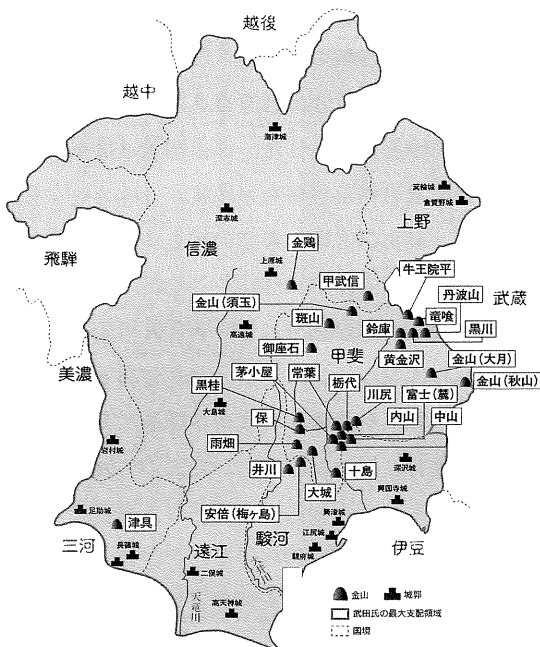
奈良時代～平安時代初期にかけて継続的に砂金が献上され、その後採金地も拡大されていった様子が伺えますが、古代の産金はほとんどが陸奥国に集中しています。その後、藤原清衡からおよそ100年間、藤原四代にわたる奥州平泉文化が開き、かのマルコポーロをして「黄金の国ジバング」と言わしめた

黄金文化を支えていたのもまた陸奥国・奥州の砂金でした。清衡62歳の時（1124年）に建立された中尊寺金色堂は平泉黄金文化を象徴するものの最たるものとして今もなお、当時の栄華を伝えています。

戦国時代への移行～武田氏最大領域内の金山～

初産金の史実から数えて約800年、その長きにわたって日本の産金を支えていたのは紛れもなく砂金でした。しかし室町時代に入ると次第に砂金量が減っていく自然の事象に反して人々はさらなる黄金を求めました。室町末ごろからの経済発展は貨幣の必要性を増し、さらにヨーロッパでの商工業が盛んになり世界貿易が発展する状況を、我が国も無視することは出来ませんでした。諸外国の人々が日本との交易を求めてやって来始めた16世紀中ごろ、まるで世界の動きに合わせるかのように、鉱山開発が急速に進み、砂金採取に代わり鉱石から金を採り出す山金採取が主流となりました。各地の武将が覇権を巡った争乱の戦国時代へ突入すると同時に、いよいよ甲斐や駿河の金山が開発され始めたのです。

戦国時代への移行～武田氏最大領域内の金山～



甲斐を本国とした武田氏は信玄とその子勝頼の時代に支配領域を最も拡大しました。武田氏との関わりを伝える金山は、湯之奥金山をはじめ、南部町十島金山、早川黒桂・保などの諸金山、塩山市の黒川金山、牛王院平・竜喰諸金山、大月市金山金山、信濃国では甲武信金山や金鷄金山、駿河国では安倍

(梅ヶ島)・井川両金山、さらには奥三河の津具金山など数多く存在し、現在確認出来るだけで約30金山にもなり、まさに黄金の国が出現していました。

佐渡相川金山は、1542年（天文11）に鶴子銀山が発見された後の1596年から開発され、さらに1603年に大久保長安が佐渡奉行となったのをきっかけに日本を代表する大産金地となりました。駿河の安倍川や大井川上流域で砂金が採取されたのは平安末期か鎌倉時代初期のころと推定されながらも、伝承のみで判然とした記録がありませんが、梅ヶ島金山が隣村井川の笹山金山とともに脚光を浴びてくるのは、今川氏領となったちょうどこの時期からのことです。

このように、各地で次々に金山が開かれ、また幕藩財政を支える重要な存在となりました。

山金採取が主流に移り変わっていく中で、砂金採取は往時のような活発さは潜めるものの途絶えることはありませんでした。それは単独採取が可能であること、技術として比較的容易であること、低コストであることが大きく関わっていたと見られます。

世界各地のゴールドラッシュ

日本の産金が衰えていった18～19世紀は、大陸型の金鉱床を源に持つ砂金の鉱床が世界の諸大陸で発見され、19世紀末になると世界は、“ゴールドラッシュ”と呼ばれる黄金時代を迎えますが、それは1537年、スペイン人によってコロンビアの砂金が発見されたことから始まります。

この発見は新大陸が主要な産金地となるきっかけとなりました。その後、1693年ミナスジェライス州、1720年にはアマゾンでも砂金が発見され、ブラジルを18世紀最大の産金地に押し上げました。しかしこれらの砂金鉱床は枯渇が早かったのも事実です。

1830年代にはシベリアのアルタイ地方やエニセイ川上流の砂金が発見され、ついで1848年、カリフォルニアのシエラ・ネバダでも発見されました。これがゴールドラッシュと呼ばれる時代の皮切りで、世界の産金量を100 t 台に押し上げる勢いをつけたのです。続いて1851年、オーストラリアのビクトリア州バララットでナゲットを含む砂金が発見され、さらに1860年に同じくビクトリア州で約71kgの世界最大級のナゲットが発見されました。このニュースは黄金ブームを加速することになり、想像を絶する驚

異的な人の動きは、図らずもアメリカの西部開拓を促す結果となったのでした。

空前の黄金ブームはその後オーストラリア、カナダ、アラスカ、フィリピンなど世界中で巻き起こり、日本でも明治中期、1898年ごろ北海道枝幸町で砂金が発見されたことをきっかけに、いよいよゴールドラッシュの波に乗ることになりました。

砂金の形状から見る自然の不思議

自然金は金そのものの中に銀や銅などの金以外の金属を含んでおり、地域格差はあるものの完全な純金の形で産出されることはほとんどなく、その色や質などの形状は一様ではありません。異なるタイプの鉱床から採集されたものを見比べると、砂金そのものに特徴があることが分かります。枝のような形をしていれば「枝状砂金」、葉の形に似ていれば「葉形砂金」などと、その形状を模して呼び名がつくこともあります。こうした形状は、大きく2つの自然力が作用しています。

一つは金の生成環境です。

そもそも日本の主要な金鉱床は火山活動と密接に関わり、地表に近いところで生成しています。このような金鉱石中に存在する金の粒子は極めて微細なものが多くが一般的です。それに対して大陸の主要な金鉱床は、数億～数十億年前に地殻変動の時期を終え、現在は安定化した広大な地域（クラトン）の岩石中に存在することが多いのです。地表にある金鉱床も、もともとは地下数千mの深部でマグマ活動による高温と高圧力で生成し、数億年にも及ぶ長い年月をかけた地殻変動により、地盤が隆起したものです。金は希少な金属ですが、このような大陸型の金鉱床の鉱石にしばしば大きな金粒が入っていることは珍しくありません。大陸の金発見が、我が国よりもはるかに時代が早かったのは、こうした地質的な理由により、しばしば大きな金粒があるため、比較的発見されやすかったからではないかと考えられます。またその結果、砂金の探索技術と回収技術は大陸の人々の手によって発達し日本に伝えられたのではないかと考えると、我が国の初産金とされる陸奥国の史実に、渡来人の大きな貢献があったとされることも納得できます。

さて、砂金の形状を左右するもう一つの大きな理

由として、地形、川の流れなど、生成後の自然環境のように後天的な力が作用している場合が考えられます。地盤の隆起によって鉱床部分が地表に近づき、さらに鉱脈を隠していた上部の岩石が浸食作用によって削り取られ、鉱脈が次第に露出してきます。地表に露出した金鉱脈はやがて風化し砂礫状になり、雨水で河川に運ばれ川底などに堆積していきます。岩石から分離されたばかりの金は角張っていますが、川に流されるにつれて角が取れて丸く小さくなっていくこともあります。まるで川の石が流され丸くなっていくことと同じ状況です。砂金の場合、海岸まで流されさらに微細な砂状態になったものを「浜砂金」とも呼びます。

同一河川で採集された砂金を見ると、上流と下流では粒子の大きさが異なってくる場合もありますが、おおよそが似た大きさであることが多く、またその形状があまりにも特徴的であると、産地を特定出来る場合もあります。なお、白金、イリジウムなどが同時に採取されることもあります。これら共存鉱物も産地特定のひとつの手掛かりになります。

砂金に、数kgにもなる塊があったり、逆に0.05ミリにもならない微細な金粒があるように、地域によって大きさ、色、質感、形状などに特徴が見られるのは、こうした自然の力が重なった結果といえます。

北海道の産金

北海道の産金に関する最古の記述は、検証の余地はありますが、1205年（元久2）知内川での記録とされています。その後続く産金の記録は、蝦夷領内の支配を任された松前藩による1646年（天保3）のもので、北海道の産金の歴史を紐解くと、金を求めた人々の悦楽の裏には、多くの問題もありました。

蝦夷藩主・松前慶広は領内における産金活動を厳禁してきましたが、彼が死去し次の公広の代になると従来の方針を一変、産金活動を許可しました。その結果1619年には5万人、翌年には8万人という人々が北海道に押し寄せたとされています。

その後、砂金掘りは、アイヌ居住区へ侵入するようになり、上流で砂金を採ると水が汚れ、鮭が川に上らなくなる、人の侵入によって動物が移動するなど、アイヌの人々の生活を脅かすことになったのです。これらが和人への不満となり、1669年（寛文9）

夏、日高染退（静内）の酋長シャクシャインが蜂起、各地で和人270人余りが殺害される「シャクシャインの乱」が起きました。この騒動は、松前藩が酋長ら20人を酒宴に招き、謀殺することで事態収拾したという結果になりましたが、これは北海道産金史の中のほんの一例に過ぎません。

“東洋のクロンダイク”という言葉があります。これは1896年（明治29）、カナダのクロンダイクで砂金が発見されたことに重ねて、北海道のゴールドラッシュを象徴する言葉です。1886年（明治31）、当時新聞で「砂金の塊は累々として横たはり、小塊は砂礫の如く眼に映じ、一朝数万円の砂金を得らるべし」という調子で書きたてられ、全国から何の知識も持たない者まで北海道に押し寄せたという黄金ブームを指していますが、こうした産金史を持つ北海道では「砂金掘り」を多くの人たちが調査研究をし、また、現在に至ってもアウトドアスポーツとして広く愛され、一つの技術、そして文化として独自のスタイルを生み出しています。

平成の「砂金掘り師」達が求めるのは？

よくこういうことを聞く人がいます。「金を掘ったらいくらになるの？」

この問いに答えるとするならば「お金にはなりません。」

昔ならまだしも、現在、純粹に砂金採取のみで生計を立てている人はいないと考えて良いでしょう。ですがここ近年、砂金掘りを趣味や自己研究、またはアウトドアスポーツとして楽しむ人が増えてきたようです。

金の価格は海外と連動しながら毎日変わります。今もなお人々の記憶に「金は高い」というイメージを与えている大きな価格変動は、昭和50年代の急激な高騰のようです。昭和51年当時、金の1g平均価



格は1,214円でした。しかし4年後の昭和55年には最高6,470円/gとなり、この年の金の平均価格は4,488円/gになりました。この価格高騰は緩やかに落ち着いていき、昭和60年には1,344円となりました。

逆に、ここ近年で、金の価格が最も下がったのは平成12年秋で、この時期はなんと1g、917円台まで落ち込み、この時期の印象が強い人は逆に「金は安くなった」というイメージがあるようです。今現在、平均1,300~1,400円/gですから、統計的に見ると高い時期と言えそうです。

砂金掘りは一日かけて1g採れるかどうかという世界ですが1g当たりの価格を考えれば、決して“お金儲け”のために砂金掘りをしている人はいないということが分かるでしょう。平成の砂金掘り師達は、換金できる“金”ではなく、古来から誰もを惹き付けた小さな光る粒が、皿の中に残り自分の手で取り出せるという原点に立ち返り、先人が馳せた夢やロマンを重ね合わせているのです。

砂金掘りのマナー

今日においては砂金掘り師を生業にするものはいませんが、趣味や研究、アウトドアスポーツとして普及しつつあります。

文献から古式の掘り方や、道具を復元したり、また日本と海外における産金事情の違いや、道具の変遷をたどる人など、“砂金”を媒体にしてそれぞれが興味を持つ分野で研究をしている人々も多く見受



けられます。しかし、砂金採集は川底を掘り返す作業であるため、地元の反感や不信感を買いやすいという面もあり、問題が全くないとはいえないのもまた事実です。

その理由の一つに、単純な物欲から、とにかく量だけ採ることを考えている人がいるということが挙げられます。北海道の一例のように、より多くの砂金を手に入れようとした大規模な採掘により現場が荒廃したり、水が汚れてしまったりしたことが歴史を振り返れば現実にあったのです。

趣味で採集をする人も、「砂金学」研究を進めていく人たちも、「砂金採集」を広く皆に楽しんでもらうためには、過去と同じ過ちを繰り返さないよう、各々個人が産地の保護とマナーを考えながら採集をしていかなければならないのです。

※参考文献

- | | |
|-------------------------------|---------------------|
| 『えぞ地の砂金』
北海道ライブラリー17 | 彌永芳子
(昭和56年) |
| 『天領梅ヶ島金山史』
梅ヶ島村史刊行会 | 新井正
(昭和62年) |
| 『みちのくの金』
アグネ技術センター | 田口勇、尾崎保博
(1995年) |
| 『金山 鹿児島は日本一』
春苑堂出版 | 浦島幸世
(平成5年) |
| 『よみがえる黄金のジパング』
岩波科学ライブラリー5 | 井澤英二
(1993年) |

他

今回の企画展を開催するにあたり次の方々に御協力いただきました。(あいうえお順・敬称略)

天野直人(静岡県)、植松春雄(神奈川県)、大森直之(東京都)、高岡伸五(静岡県)、野村敏郎(兵庫県)、林謙治(神奈川県)、広瀬義朗(神奈川県)、福井玲(静岡県)、身延町教育委員会(山梨県)

活動報告

「甲州金・大判・小判」の展示公開始まる

常設展示室改修工事も無事終わり、奥山家所蔵金貨の一般公開が2月21日から始まりました。

この週の日曜日、23日には、寄託者の奥山源栄さん御夫婦と御家族の皆様にもおいでいただき、ささやかながら感謝状贈呈式を執り行いました。

谷口館長から花束と金箔感謝状を手渡され、展示ケースに堂々と並んだ金貨を改めて御覧になりながら、「自分の所にあった時と、こうして見るとまた違いますね」と穏やかな口調で感想を述べられた奥山さん。また、「今後広く皆さんに御覧いただくことで、学術研究に広く活用してもらえれば」と御家族の方々もおっしゃっていました。



奥山家所蔵金貨の一般公開にあわせて、常設展示も一部追加、キャプションも変更しております。また、御覧いただく皆様にとってより一層分かりやすいように展示解説シートも追加設置しておりますので、学術研究、個人研究にはもちろん、子ども達の自由研究などにも合わせて御活用ください。

親子映画観賞会

3月26日の水曜日、休館日を利用して午後1時から「春休み親子映画観賞会」を開催いたしました。上映作品はドラえもん、アイスエイジ、少林サッカーの3作品。前回の映画会が悪天候のため中止になってしまったこともあり、随分楽しみにしてくれていた子ども達もいました。

この映画会も定着してきて最近では平均60人~70人くらいの申し込みがあります。顔なじみも増え、帰

りには皆にアンケートの協力をお願いしていますが、その時に用紙に書くだけでなく「面白かったよ」、「今度はこういうのやってね」と声を出して帰っていく子ども達もたくさんいます。

次回開催予定は5月、6月、そして夏休みと続きますが、詳細は学校への配布チラシ、町内放送でお知らせしますので楽しみにしててください。

平成14年度 公開講座終了

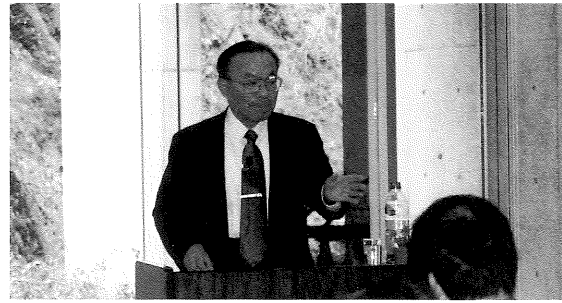
昨年10月から5回にわたり開催されてきました公開講座が2月をもって終了いたしました。



1月 講演中の平山先生

1月18日(土)は山梨県史編さん室の平山 優先生が「穴山梅雪と金山～文献から見た穴山氏と金山～」と題しお話しくださいました。平山先生の流れるようなお話し振りにひきつけられ、皆興味深そうに真剣に聴講していました。

また2月22日(土)には帝京大学山梨文化財研究所所長・萩原三雄先生に「甲斐金山の展望～金山史研究の現状と将来～」と題し、これまでなされてきた金山史研究の総括としてお話しくださいました。



2月 講演中の萩原先生

通算30回目のこの講演をもって、14年度の公開講座はすべて終了ということになりましたが、それぞれの講演後には聴講生と先生との間で質疑応答が交わされるなど、全体を通して活発な印象を受けました。今年度も多くの方々の御聴講をいただきましてありがとうございました。また新規テーマのもと、10月から平成15年度公開講座を開催いたしますので、こちらもよろしくお願ひいたします。

なお、この平成14年度講演内容は今後、講演記録集『金山史研究』として発刊予定です。

館からのお知らせ

『金山史研究第4集』発刊のお知らせ

現在博物館では、御講演いただいた講師の先生方の御協力をいただき、平成12年度公開講座の記録集として『金山史研究第4集』の発刊準備を進めてお

ります。A4判220ページ、カラー図版付（一般2,000円）。一般版付は5月上旬を予定しています。

編集後記

日中は本当に暖かくなり、随分と過ごしやすくなりましたね。

さて、今回の『博物館だより』は見ての通り、表紙を第6回企画展「砂金学ノススメ～各地の砂金と採集具展～」のポスターで飾っていますが、内容も

企画展の展示解説にもなるよう合わせて編集しています。展示場では各地の川で採集された砂金、採集道具類など約150点を、日本産金史とからめ展示しています。観覧無料でゴールデンウィーク明けの5月11日(日)まで開催しておりますので、博物館までおいでの際には、是非御覧になってください。

博物館だより

第24号
平成15年3月31日

発行 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
TEL 0556 (36) 0015
FAX 0556 (36) 0003

博物館ホームページアドレス <http://www.2.town.shimobe.yamanashi.jp/kinzan/>

博物館Eメールアドレス kinzan@town.shimobe.yamanashi.jp